

黒津原遺跡

平成18年度町道983号線道路拡幅工事に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書



2007年

長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
箕輪町教育委員会

黒津原遺跡

平成18年度町道983号線道路拡幅工事に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2007年

長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
箕輪町教育委員会

序

箕輪町は伊那谷の北部にあり、豊な自然に恵まれた、歴史と文化のある町です。先史の頃よりこの地の生み出す自然の恵みを求めて人々が暮らし始め、各時代を生きた先人達の努力によって今日の町の姿が築き上げられてきました。町内には、彼らが残した証である多くの遺跡が残されています。

調査対象となった黒津原遺跡を含む一帯は、県の重要遺跡として登録される「福与大原遺跡群」にあたり、現在も古くからの地形景観を残す保存状態のよい町内第一級の遺跡です。これまで耕作中に偶然出土した上器や石器が数多く収集され、その中には、他にあまり例を見ない土製品や装飾土器などの珍しい品が含まれ、今も町郷土博物館で大切に保管・公開をしています。また、これまでこの遺跡群内の大原遺跡と上金遺跡において発掘調査が行われましたが、縄文時代や古代に営まれた集落跡が発見され、当時の暮らしと文化を知る貴重な資料が得られています。

今回、黒津原遺跡内で町の道路拡幅工事が計画され、町教育委員会が工事に先行して発掘調査による記録保存を図りました。調査の成果につきましては、本書の各章にて詳しく記しております。これを多くの皆様に広く活用いただき、地域の歴史と文化を解明する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、多大なるご理解とご協力をいただきました地元福与区と耕作者の皆様をはじめ、調査にご尽力いただきました各関係者の皆様に、本書の刊行にあたり心より感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成18年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字福与382番地1他に所在する、黒津原遺跡緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査及び整理作業等の記録保存業務は、箕輪町土地開発公社より委託を受け、箕輪町教育委員会が実施した。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。
遺物の洗浄・注記－大串久子、根橋とし子
遺構図の整理・トレース－大串久子、白鳥弘子、根橋とし子
遺物の実測・拓本・トレース－大串久子、白鳥弘子
挿図作成－大串久子、春日誠子、後藤主計、白鳥弘子、根橋とし子、向山英人
写真撮影・図版作成－赤松 茂、根橋とし子
- 4 本書の執筆は、赤松 茂、根橋とし子が行った。
- 5 本書の編集は、赤松 茂、大串久子、白鳥弘子、根橋とし子が行った。
- 6 出土鉄器は、師帝京大学山梨文化財研究所に業務を委託し保存処理を行った。
- 7 発掘箇所の記録は、世界測地系座標により位置を落とした。
- 8 出土遺物及び図面写真類と本書作成に関わる図版写真類は、すべて箕輪町教育委員会が管理し、箕輪町郷土博物館に保管している。
- 9 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関にご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。(50音順)
個人－浅野義高、井口秋次、井口幸夫、井口敏彦、小川利明、春日 熟、北原文人、小池君代、
小池純夫、小池正志、白鳥 覚、田中克典、細井紀光、丸田 見
機関－財長野県埋蔵文化財センター、福与区、箕輪町土地開発公社、ミノワノーブル株式会社

凡　　例

- 1 挿図
 - ・挿図の縮尺は、各図の下部に表記（スケールを有するものも含む）した。
 - ・遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表す。
－焼土 －土器
 - ・土器実測図及び拓影図中のスクリーントーン表示は、以下のものを表す。
－須恵器断面 －土師器内面黒色処理
- 2 土層及び遺物観察
 - ・土層及び土器の色調は、『新版 標準土色帖』を用いて記してある。
 - ・出土土器観察表の法量は、上から「口径・底径・器高」の順に記し、単位はセンチメートル(cm)である。また、現存する数値は「()」、推定数値は「()」、計測不能は「-」で表している。
 - ・出土金属器と石器観察表の重量の単位は、グラム(g)で表している。法量は、現存する数値は「()」で、計測不能は「-」で表している。

本文目次

序

例 言

凡 例

本文目次

掲図目次

表目次

第1章 発掘調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査概要と体制.....	2
第3節 調査日誌.....	3
第2章 遺跡の環境.....	4
第1節 地形と地質.....	4
第2節 歴史環境.....	5
第3章 調査結果.....	8
第1節 調査方法.....	8
第2節 上層堆積状況.....	10
第3節 遺構と遺物.....	13
1 竪穴住居址.....	13
2 掘立柱建物址.....	16
3 土坑・ピット.....	19
4 遺構外出土遺物.....	22
第4章 総 括.....	27

参考・引用文献

報告書抄録

挿図目次

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 第1図 調査位置図 | 第8図 1号掘立柱建物址実測図 |
| 第2図 周辺遺跡分布図 | 第9図 1号掘立柱建物址出土土器実測図 |
| 第3図 調査区設定図 | 第10図 2号掘立柱建物址実測図 |
| 第4図 土層断面図 | 第11図 上坑・ビット実測図 |
| 第5図 遺構配置図(全体図) | 第12図 遺構外出土縄文土器拓影図1 |
| 第6図 1号住居址実測図 | 第13図 遺構外出土縄文土器拓影図2 |
| 第7図 1号住居址出土遺物実測図・拓影図 | 第14図 遺構外出土石器実測図 |

表目次

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 第1表 周辺遺跡一覧表 | 第4表 1号掘立柱建物址出土土器観察表 |
| 第2表 1号住居址出土土器観察表 | 第5表 上坑・ビット一覧表 |
| 第3表 1号住居址出土金属器観察表 | 第6表 遺構外出土石器観察表 |

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

黒津原遺跡が所在する箕輪町福与区は、町の南東部に位置している。遺跡は、東方に連なる伊那山地の不動ヶ峰南西麓より西方に流れる判の木沢や、その他中小河川の押し出しによって形成された複合扇状地下部の緩やかな傾斜地に立地し、ここからは南方に仙丈岳、北方に守屋山、また西方には天竜川を望むことができる。

遺跡は、県の重要遺跡として登録される「福与大原遺跡群」内に属し、町内でも比較的保存状態のよい遺跡包蔵地として知られている。これまで同遺跡群内では、昭和52・53年度に大原遺跡、更に昭和61年度には上金遺跡において、農業基盤整備事業等による開発行為に先立って緊急発掘調査が行われ、縄文時代早期から晩期、平安時代の堅穴住居址等の多くの遺構と遺物が検出されている。



第1図 調査位置図 (1 : 20,000)

今回、町が事業主体となる福与工業団地周辺整備計画の中で、既存道路への上下水道の敷設と共に、本道跡包蔵地内を横断する町道983号線の全面改良が行われることになり、平成17年10月に事業担当である箕輪町土地開発公社から町教育委員会に対し、具体的な開発計画の内容が提示された。これを受けて、遺跡の保護処置をめぐり2者間で協議を重ねてきたが、本件が県の重要遺跡での開発行為であることから、県教育委員会の指導及び助言を仰ぐこととなった。同年12月に3者間で保護協議を行った結果、既存道路の改良であることで遺跡は最小限度の範囲の破壊に留まるとの判断で、工事着手前に発掘調査を実施し、記録保存を行うことになった。また、同公社が調査に係る費用負担等の全面協力を了承し、調査業務を町教育委員会に委託することになった。

平成18年6月1日に2者間で調査業務の委託受託契約が締結され、町教育委員会は現地調査と整理作業及び報告書作成業務を実施し、本書の刊行に至った。

第2節 調査概要と体制

1 遺 跡 名	黒津原遺跡
2 所 在 地	長野県上伊那郡箕輪町大字福与382番地1他
3 事 業 期 間	平成18年6月1日～19年3月15日 (発掘調査 平成18年6月1日～11月27日) (整理作業 平成18年11月28日～19年3月15日)
4 事 務 局	
教 育 長	小林 通昭
生涯学習課長	平井 克則 (平成18年9月30日まで) 中村 文好 (平成18年10月1日から)
同 文化財係主幹	赤松 茂
同 副 主 幹	有賀 治
同 副 主 幹	柴 秀毅
臨 時 職 員	中村 孝子
5 調 査 团	
調 査 団 長	小林 通昭
調 査 副 团 長	平井 克則 (平成18年9月30日まで) 中村 文好 (平成18年10月1日から)
調 査 担 当 者	赤松 茂
調 査 員	根橋とし子
調 査 团 員	泉沢徳二郎、伊藤 鮎彦、今閑 貞夫、浦野 勝雄、大串 久子、大槻 刚、岡田 和宏、岡田テル子、小川 陽三、河西ひろみ、春日 誠子、唐沢 清光、小松 峰人、塩澤 雄、白鳥 弘子、藤沢 具明、藤沢 達雄、堀川 利平、松崎 伸子、宮下 春樹、向山 英人 (※50音順)

第3節 調査日誌

- 7月10日(月) 調査開始。調査区の範囲設定を行う。
- 7月12日(水) 重機で表土剥ぎを始める。15日(土)まで。
- 7月26日(水) 先週の集中豪雨により、調査地が雨水と湧き水により水没したため、終日排水作業を行う。28日(金)まで。
- 7月31日(月) 絡团式を行い、遺構検出作業を開始する。流入した土砂の排出作業を行う。
- 8月1日(火) 土砂の排出作業と併行し、遺構の確認作業を行う。1号掘立柱建物址を検出する。
- 8月2日(水) 1号掘立柱建物址の掘りと土層断面測量、遺構確認作業を継続する。
- 8月3日(木) 遺構確認作業と検出した土坑を掘る。
- 8月4日(金) 遺構確認作業と土坑を掘る。
- 8月7日(月) 土坑の掘りとサブトレーンチによる遺構確認作業。
- 8月8日(火) サブトレーンチでの遺構確認作業。
- 8月9日(水) ピットの掘りと土層断面測量。
- 8月10日(木) ピットの掘りと土層断面測量を継続。
- 8月11日(金) ピットの掘り下げと平面測量。
- 8月17日(水) 遺構の写真撮影。公民館歴史講座の見学者が訪れる。
- 8月22日(火) 写真撮影及び測量作業。28日(月)まで。
- 8月30日(水) 調査区東部の表土剥ぎ。9月4日(月)まで。
- 9月5日(火) 遺構確認作業。
- 9月6日(水) 遺構確認作業と1号住居址を検出し、掘り下げる。
- 9月8日(金) 1号住居址の断面測量。
- 9月11日(月) 1号住居址の掘りと2号掘立柱建物址の検出と掘り。
- 9月15日(金) 1号住居址の遣り方測量と平面測量。
2号掘立柱建物址の土層断面測量。
- 9月22日(金) 2号掘立柱建物址の平面測量。
- 9月29日(金) 全体測量。一旦調査終了。
- 10月23日(月)・11月27日(月) 立会い調査。調査終了。



第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスにはさまれた、南北70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また、諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。箕輪町を含む伊那盆地は、天竜川の低地帯から両アルプスの山頂に至って、大起伏地形となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10km幅にそれが集中する、きわめて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

以前は、伊那谷の特徴を表すとして注目されていた段丘状の地形が配列している様子は、天竜川の侵食による河岸段丘と考えられていたが、現在はそれが中央・南両アルプスの上昇に伴う地殻変動の結果、断層によって造り出された断層崖である、ということが研究によってわかってきた。各地でこうした断層の調査が行われ、伊那谷の地形の歴史は以前より詳しく把握されつつある。そのようなことから今後



上空より遺跡地を望む（1：6,000 平成12年撮影）

箕輪町においても、さらに詳しい調査が望まれるところである。

遺跡が所在する福与区と北部に隣接する三日町区は、天竜川の東側にあたり、いわゆる「竜東」とよばれる。箕輪町では、複合扇状地によって形成された、広大で平坦な地形が続く竜西侧に比べ、竜東側は、小規模の山が近くにせまり変化に富んだ地形となっており、比較的平坦地が狭く緩傾斜が続いている。基本的に一帯の地形を造り出している要因としては、東部山麓から流れ出す中小河川の押し出しにより形成された複合扇状地である。現在では、耕作や造成に伴いわかりにくいか、以前は、うねりをもちらながら西方へ緩やかに傾斜するという、この扇状地の特徴がもっと明瞭に現われていたと思われる。傾斜も西部扇状地に比べて勾配が強いため、それら中小河川の流路が傾斜地を侵食し深い谷地形が形成される。遺跡の多くは、谷と谷との間に舌状に残る台地上に分布する傾向が観られる。

地質においては、竜西側は複合扇状地の形成に伴い、広く扇状地の堆積物で覆われている。それに対し竜東側では、花崗岩や粘板岩などを中心とし、領家変成岩からなる結晶質石灰岩や石英玢岩が分布するなど、変化に富んだ地質になっている。また、伊那谷を覆っている被覆層は竜西側では厚く、基盤岩の露出は少ないと比べ、竜東側の被覆層は比較的浅く、断片的である。そのため、天竜川の支流の谷沿いには基盤岩が露出し、天竜川の合流点まで続いている。

引用参考文献

伊那市教育委員会・上伊那地方事務所 小黒南原・伊勢並遺跡 緊急発掘調査報告書 1992.3

松島信幸 伊那谷の造地地形史 伊那谷の活断層と第四期地質 1995.3.31

第2節 歴史環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など水源に恵まれており、先史より人が暮らしやすい格好の場が多い。町内には、先人たちの足跡ともいいくべき多くの遺跡が残されており、平成6～8年度に実施した遺跡詳細布調査により、包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、周知されている。

今回調査対象となった本遺跡を含む竜東南部地域には、上記の遺跡数のおよそ30%が集中する。これまでに実施された本地域での発掘調査事例から、これらを代表する遺跡について概観しておく。

昭和52・53年度には、福与大原遺跡（180）において団体営土地改良工事に先立って3地点で発掘調査が行われた。第1地点では、縄文時代早期細久保式を主体とする押型文土器を包含する竪穴造構8基、奈良時代末～平安時代初期の竪穴住居址3軒の他、遺物包含層からは縄文前・中・後・晩期の幅広い時期に渡る多くの上器・石器が出土している。

同61年度には、排水路新設工事に先立って上金遺跡（175）の調査が行われ、埋甕を伴う縄文時代中期後葉と平安時代（10世紀頃）の竪穴住居址各1軒ずつが検出されている。

平成3年度には、上水道排水池建設に伴う郷沢遺跡（181）の調査が行われ、焼失の形跡を残す縄文時代前期木造の住居址1軒と、小形器台と高杯を伴う古墳時代前期の住居址1軒を検出している。共に町内では他に類例がなく、歴史の空白を埋める貴重な発見となった。この他、台地を寸断するように戦国時代構築と考えられる「堀切」が発見され、北西およそ1km先に所在する福与城址の関連施設の



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 20,000)

可能性が示唆された。

同10年度に実施した、ふるさと農道建設工事に先立つ福与中村遺跡（168）の調査では、縄文時代中期後葉の住居址2軒が検出され、1号住居址付属の土坑内からは炭化したドングリが大量に出土した。

平成12、13年度には、長野県史跡福与城跡（165）において城跡整備事業に伴う調査を実施している。城跡は、戦国時代にこの地を支配した藤沢頼親の居城として知られているが、調査では15世紀中頃～16世紀中頃にかけての遺物や、それに伴う遺構が確認された。さらに13世紀後半～14世紀のものと思われる甕や壺の破片が出土し、城の使用年代が13世紀後半に遡る可能性も考えられている。

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代							立地	地目	調査歴	備考
			旧	開	弥	吉	奈	平	中				
174	黒油塗	福井		○	○	○		○	○	段丘尖端	畑		
84	上の林	木下		○	○			○		段丘尖端	宅地	昭55~57・60、平2・4年	
85	花城	*		○	○			○	○	段丘尖端	宅地	昭47年	城跡含む
86	西城	*		○	○			○	○	段丘尖端	宅地・畑・田	昭52年	
87	蘿茶	*			○			○		段丘尖端	宅地・畠	昭49年	
88	鹿安路	*		○				○		段丘尖端	宅地・畑		
89	大土	*		○	○	○		○	○	段丘尖端	宅地・畑		
90	西面外	*		○				○	○	頂央	宅地・畑		
91	芝原	*						○		頂央	宅地・畑		
92	下町	*			○			○		頂央	宅地		
93	中町	*				○		○	○	頂央	宅地		
94	下前	*		○				○		頂央	宅地		
95	芳谷	*		○	○	○		○		頂端	宅地・畑		
96	殿治櫛塚外	*		○	○	○		○		頂端	宅地・畑		
97	鳥山	*		○	○	○		○		頂端	宅地・畑		
192	木下山塚	*			○					段丘下	宅地		
211	實輪城	*						○		段丘尖端	墓地・林		町史跡
98	真輪	木下・三日町	○	○	○		○	○	○	平地	宅地・畑	昭55~57、平2・4・5・8・12・14・5・17年	
154	坂頭	三日町	○	○			○	○	○	崩壊	畑		
155	剣射山	*	○				○	○	○	頂央	畑	昭54年	
156	弓箭	*	○				○	○		台地	畑		
157	二仙廻坂	*	○				○	○		台地	畑		
158	上御北島	*	○	○	○		○	○	○	台地	宅地・畑		
159	蓮心寺下	*	○	○	○		○	○		崩頂～央	田	昭55年	
160	大原山	*	○				○			崩頂～央	畑・田		
161	小原山	*	○							平地	宅地		
206	关于藤古墳	*			○					頂央	畑	昭57年	
206	おじよろ櫛古墳	*			○					崩火	畑		
219	出中城	*					○			平地	田	昭58年	町史跡
163	越山	福井	○				○	○	○	台地	宅地・畑		
184	越原南	*					○			崩頂～央	宅地・畑・出		
165	轟ノ後	轟ノ・三日町	○				○	○	○	段丘尖端	畑・史跡公園	平12・13年	県史跡
166	越与城東	福井	○				○	○	○	崩央	灌	平10年	
167	利の木	*	○				○	○	○	崩央～端	宅地・畑		
168	熊ノ中村	*	○				○			崩頂	宅地・畑	平10年	
169	延房森	*	○	○			○	○	○	崩頂	畑		
170	二木松	*	○				○			段丘尖端	宅地・畑		円満塔含む
171	利の木南	*	○				○	○	○	崩央	畑・出		
172	北船外	*	○	○			○	○		段丘尖端	宅地・畑		
173	利の木	*	○	○	○		○			段丘尖端	宅地・畑		
175	上翁	*	○	○			○			段丘尖端	畑	昭61年	
176	矢山灰	*	○	○	○		○			段丘尖端	畑		
177	大山	*	○	○	○		○			段丘尖端	畑		
178	上の山	*	○	○	○		○			段丘尖端	畑		
179	福原	*	○	○	○		○	○	○	崩央	宅地・畑	昭52年	
180	福井人跡	*	○	○	○		○	○	○	崩央	宅地・畑	昭53年	
181	藤原	*	○	○	○		○	○	○	崩頂～央	宅地・畑	平3年	
182	云仏	*	○				○	○	○	崩頂	宅地・畑		

第1表 周辺遺跡一覧表

第3章 調査結果

第1節 調査方法

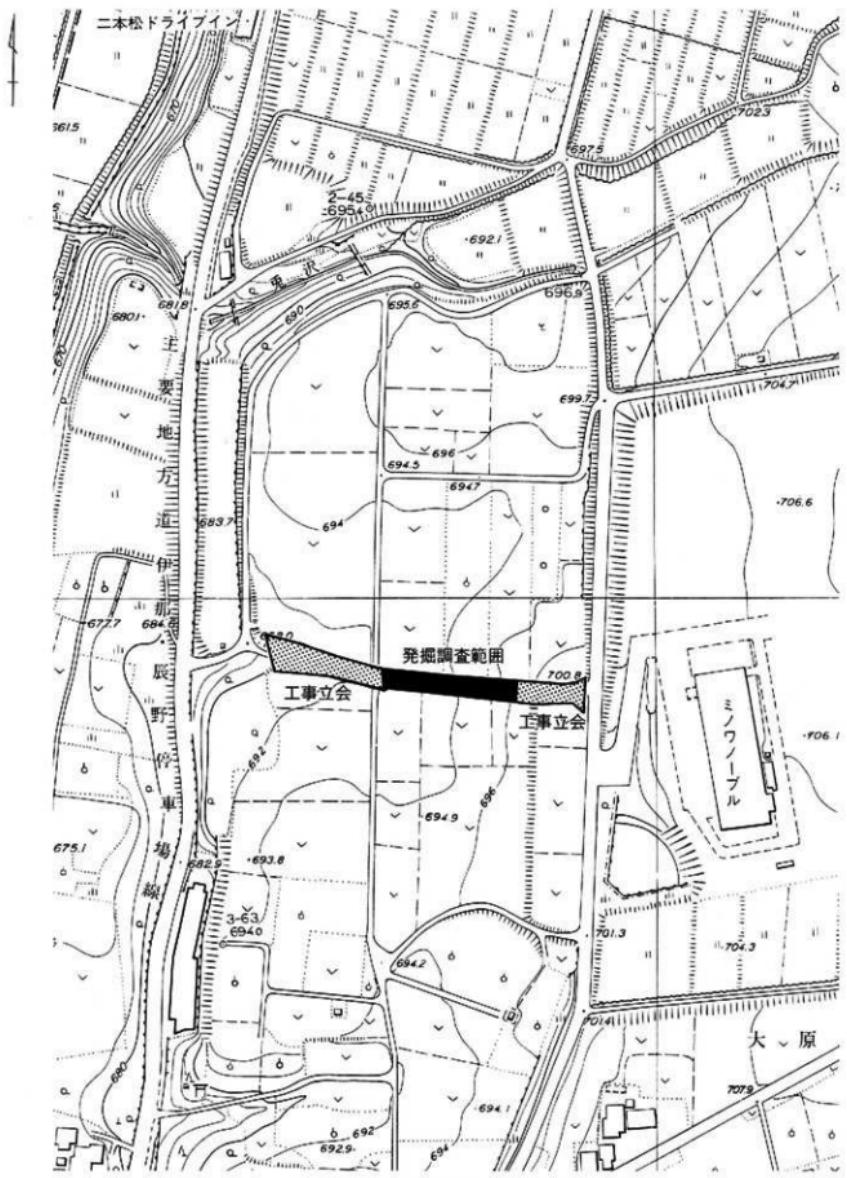
発掘調査は、道路拡幅工事によって文化財が消滅する事が予測される、町道983号線の東側995m²を発掘調査の対象とした。

作業手順としては、まず大型重機により遺構確認層直上までの表土を除去し、続いて人力による遺構検出作業を進め、検出した各遺構の掘り下げを行った。各遺構より出土した遺物は、各遺構の覆土中の土器片については層位ごとに取り上げ、床面直上の遺物は記録後に番号を付けて取り上げた。

測量による記録作業は、遺構平面図及び遺構から出土した遺物は、平板及び簡易置り方測量にて1:10、1:20縮尺で作図し、土層断面も1:10、1:20の縮尺で作図した。座標及び方位はトータルステーションを使用し、調査地全域を世界測地系の基準線を重ねて記録した。また、標高の基準点は、調査区東部の境界柱に任意のベンチマーク(693.62m)を設定した。写真による記録は、一眼レフデジタルカメラ撮影と、35mm一眼レフカメラによるモノクロ及びカラーリバーサルフィルム撮影を行った。また、必要に応じ6×7カメラによるカラーリバーサルフィルム撮影も行っている。なお、本書に掲載した遺物写真は、一眼レフデジタルカメラにて撮影した。



調査地全景（西方より）

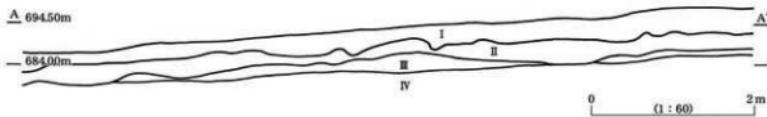


第3図 調査区設定図（1:2,500）

第2節 土層堆積状況（第4図）

調査地は畠として使用されていたため、表層に耕作土が20cm程度堆積していた（I層）。その下は整地による人为的堆積土（II層）、褐色の自然堆積層（漸移層III層）、明褐色のローム（テフラ）層（IV層）の4層に分けられた。遺構はIII層確認面で検出し、IV層まで掘り込まれる。各層の詳細は以下の通りである。

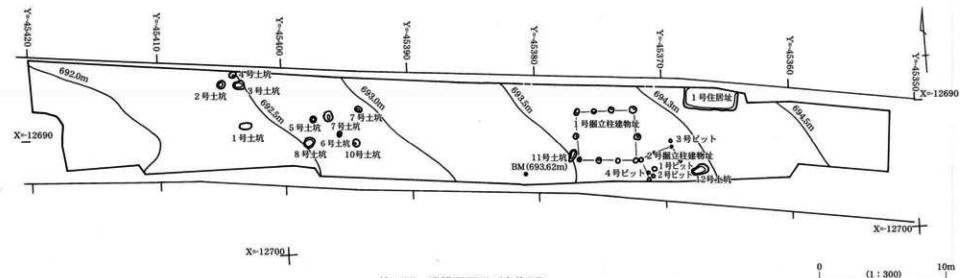
- I層 7.5YR3/3（極暗褐色）旧畠の耕作土。締りはやや強く、粘性は弱い。
- II層 7.5YR5/6（明褐色）人为的堆積層。締りは強く、粘性はやや強い。
- III層 7.5YR4/4（褐色）漸移層。ローム粒子を30%含む。締りは強く、粘性はやや強い。
- IV層 7.5YR（明褐色）ローム（テフラ）層。締り・粘性共に強い。



第4図 土層断面図



土層堆積状況（南方より）



第5図 遺構配置図（全体図）



遺構検出状況1（東方より）



同2(東方より)

第3節 遺構と遺物

1 穫穴住居址

1号竪穴住居址（第6図）

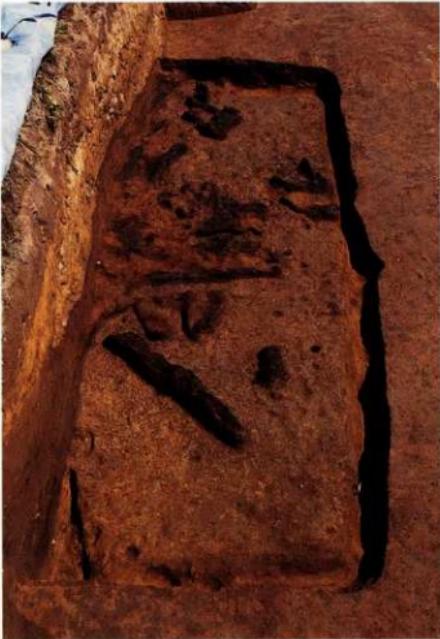
位置：調査区北東部、世界測地系X=−12691.50, Y=−45366.00に位置する。主軸方向:N−100°−E。規模・形状：長軸4.25m、短軸(1.73)mを測り、方形を呈すると思われるが、本址北側半分は調査区外のため詳細は不明。覆土：9分層され、全体的にローム粒子、炭化物が含まれ、一部に焼土もみられる。床面・壁：住居址中央の床面直上付近から厚さ5cm程の焼土や、炭化物及び住居の垂木と思われる炭化した木材が検出された事から、本址は火事による焼失住居であると推測される。壁残高は37cm～51cmあり、傾斜はほぼ垂直に立ち上がる。壁下には周溝が検出された。カマド：本址東側中央に白色ロームを多く含む層が確認されたが、カマドと思われる部分は調査区外のため確認できなかった。柱穴：柱穴と思われるものは検出できなかった。その他の施設：東壁に接して袋状のビットが検出され、形状から貯蔵穴の性格をもつ施設ではないかと推測される。なお、このビット内から鉄製の紡錘車(11)が出土している。遺物：須恵器の壺(1)と内面黒色処理された土師器の壺(2)が出土した。また、長胴甕が6点(3～8)、ロクロ成形による甕(9)、須恵器の大甕(10)も出土した。鉄製品では紡錘車(11)が出土している。各遺物の特徴は、

別表を参照されたい。時期：平安時代初頭、

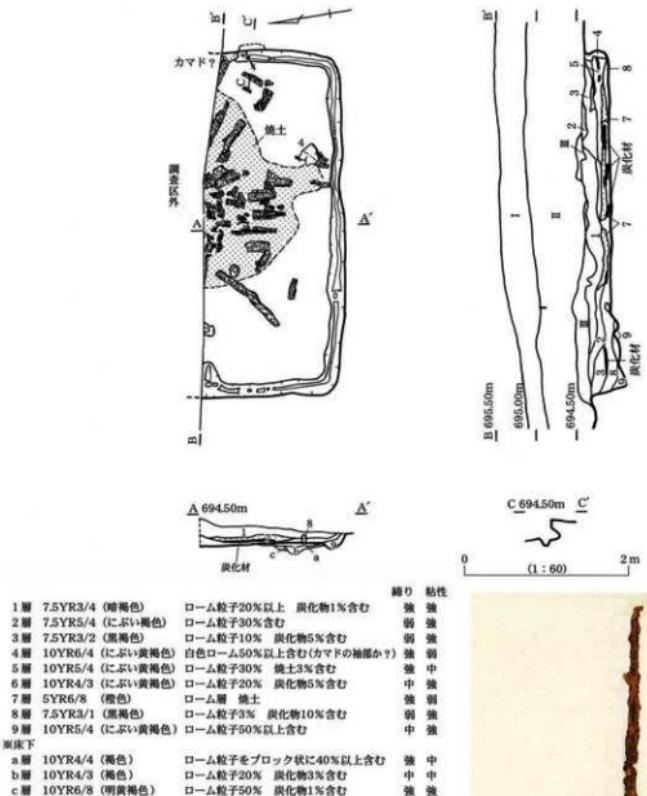
9世紀前半から中頃と推測する。



紡錘車出土状況



1号竪穴住居址検出状況（西方より）



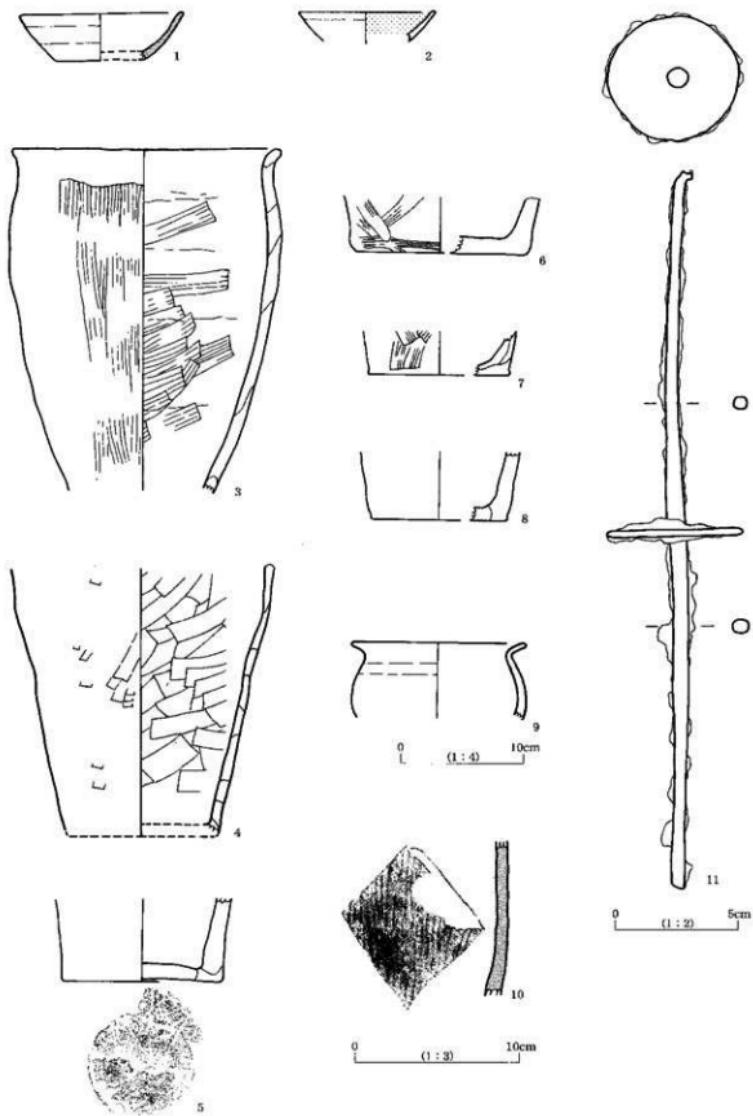
第6図 1号住居址実測図



長胴甕 (3)



紡錘車 (11)



第7図 1号住居址出土遺物実測図・拓影図

法盛-上より10件 軸径 器高(単位cm)										
No.	種別	器種	法量	残存度	成形・器形の特徴	文様・調整	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器	壺	(13.5) — (3.8)	30%	ロクロ成形 底部回転糸切り	内面-ロクロナデ 外面-ロクロナデ	砂粒まばら に含む	不良	外面-10YR7/4(にぶい黄褐色) 内面-10YR8/4(後黄褐色)	部分的に 炭化物付着
2	土師器	壺	(11.4) — (2.5)	10%	ロクロ成形	内面-ミガキ 黒色処理 外面-ロクロナデ	砂粒・小礫 含む	良好	外面-7.5YR7/6(純い黄褐色) 内面-N1.5(黒色)	
3	土師器	長胴甕	(22.2) — (28.3)	40%	輪積み成形 直線的に立ち上がる	内面-11縁ヨコナデ 脇部ハケ(縱方向) 外面-10縁ヨコナデ 脇部ハケ(横方向)	長石・雲母・ 石英等の小礫 含む	良好	外面-7.5YR6/8(褐色) 内面-10YR6/6(黄褐色)	外面に二 次焼成による 粘土付着
4	土師器	長胴甕	(12.6) — (21.7)	25%	輪積み成形 直線的に立ち上がる	外面-ハラナデ(縱方向) 内面-ハケ(横方向)	長石・雲母・ 石英等の小礫 含む	良好	外面-10YR6/4(にぶい黄褐色) 内面-10YR6/4(にぶい黄褐色)	外面に炭 化物付着
5	土師器	長胴甕	— (6.9)	10%	輪積み成形 直線的に立ち上がる	内面-ナデ 外面-ナデ(底部木充)	長石・雲母・ 石英等の小礫 含む	やや 良好	外面-10YR4/4(褐色) 内面-10YR5/3(にぶい黄褐色)	外面に炭 化物付着
6	土師器	長胴甕	(14.0) — (4.5)	5%	輪積み成形	外面 ハケ 内面-ナデ	長石・雲母・ 石英等の小礫 含む	良好	外面-10YR4/4(褐色) 内面-10YR5/3(にぶい黄褐色)	外面に炭 化物付着
7	土師器	長胴甕	— (11.8) — (3.6)	10%	輪積み成形	外面-ハケ 内面-ナデ	長石・雲母・ 石英等の小礫 含む	良好	外面-10YR5/6(黄褐色) 内面-5YR6/8(褐色)	
8	土師器	長胴甕	— (11.0) — (5.7)	5%	輪積み成形	外面-ナデ 内面-ナデ	長石・雲母・ 石英等の小礫 含む	良好	外面-10YR5/6(黄褐色) 内面-7.5YR6/6(褐色)	
9	土師器	甕	(14.4) — (6.4)	30%	ロクロ成形	内面-ロクロナデ 外面-ロクロナデ	小石多く含む	良好	外面-5YR5/4(にぶい赤褐色) 内面-10YR5/6(明赤褐色)	
10	須恵器	大甕	— — —	—	輪積み成形	内面-タタキ 外面-ナデ	長石・石英等の小礫 含む	良好	外面-N3(暗灰色) 内面-7.5Y4/1(灰褐色) 背面-N7(灰白色)	内外表面 自然釉付着

第2表 1号住居址出土土器観察表

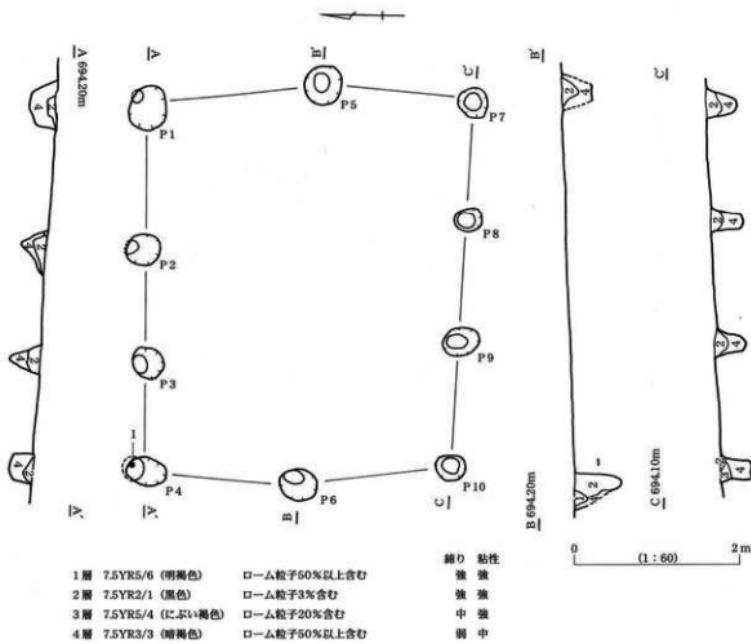
(法量cm・g)								
No.	器種	材質	残存度	長さ	軸径	筋輪形	重さ	備考
1	紡錘車	鉄	100%	29.4	0.6	5.0	63.0	

第3表 1号住居址出土金属器観察表

2 捩立柱建物址

1号撗立柱建物址 (第8図)

位置：調査区中央部やや東、世界測地系X=-12694.35、Y=-45374.50に位置する。長軸方向：N-91°-E。規模・形状：平面規模は南北方向（長軸）に4.37m、東西方向（短軸）に3.55mを測る。柱穴配列は長方形を呈し、柱間は長軸3間、短軸2間である。柱穴：ピット10基で構成され、ほぼ円形を呈する。平面規模は直径22~43cmを測り、深さは29cm~55cmを測る。P 1、4、5、10の底部はロームブロックで堅くたたき締められていたが、軟弱なピットも確認された。覆土：全体的に2分層され、ローム粒子を含むが、P 6、10は3分層されていた。遺物：須恵器の壺（1）がP 4下部より出土した。時期・性格：遺物の出土量が少ないため、正確な判断は出来ないが、1号堅穴住居址とほぼ同時期の平安時代初頭、9世紀前半から中頃と推測する。



第8図 1号掘立柱建物址実測図



1号掘立柱建物址検出状況



第9図 1号掘立柱建物址出土土器実測図

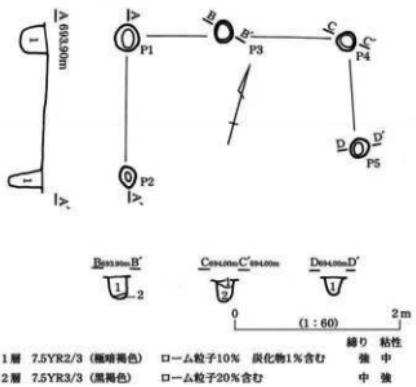


法量=上より口径 底径 器高 (単位:cm)										
No.	種別	器種	法量	残存度	成形・器形の特徴	文様・調査	胎土	焼成	色 調	備考
1	須恵器	杯	(12.2) 5.8 3.7	70%	口クロ成形 底部回転糸切り	内面-ロクロナデ 外面-ロクロナデ	砂粒まばら に含む	やや 不良	外面-7.5GY7/1(明緑灰色) 内面-7.5GY7/1(明緑灰色)	P4下部 より出土

第4表 1号掘立柱建物址出土土器観察表

2号掘立柱建物址（第10図）

位置：調査区南東部、世界測地系X = -12698.00、Y = -45369.90に位置する。長軸方向：N-14°-W。規模・形状：平面規模は南北方向（長軸）に(2.0)m、東西方向（短軸）に2.93mを測る。柱穴配列は長方形を呈すると推測されるが、本址南側半分が調査区外のため、正確なプランは不明。柱間は長軸2間以上、短軸2間と思われる。柱穴：小さめのピット5基で構成され、ほぼ円形を呈する。平面規模は直径21~32cmを測り、深さは21cm~42cmを測る。底部はロームブロックで堅くたたき締められている。覆土：P1、2、5は単層で、P3、4は2分層されており、ローム粒子と一部炭化物を含む。遺物：土器片が少量出土した。時期・性格：遺物の出土量が少ないため不明。

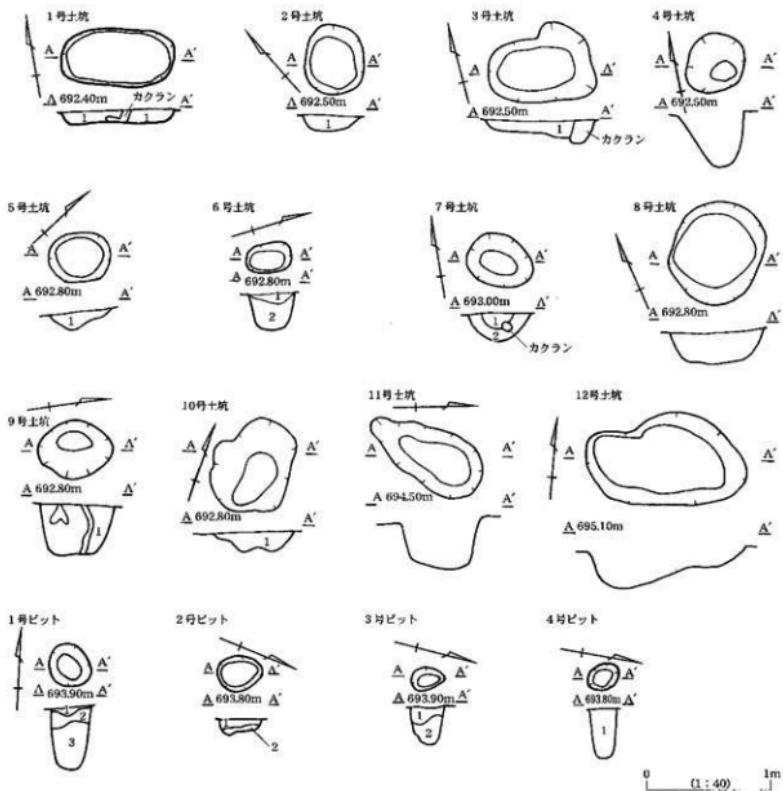


2号掘立柱建物址検出状況（北方より）

第10図 2号掘立柱建物址実測図

3 土坑・ピット

土坑12基、ピット4基が検出された（直径40cm以上のものを土坑、以下ものをピットとした）。土坑のほとんどが調査区中央より西側にまとまって検出され、ピットは調査区中央より東側の2号掘立柱建物址付近で検出された。いずれも出土遺物が少量であるため、時期については不明。詳細は土坑・ピット一覧表（第5表）を参照されたい。



第11図 土坑・ピット実測図



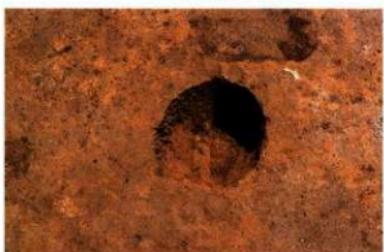
1号土坑



2・4・3号土坑（左より）



8・5・10・6号土坑（左より）



7号土坑



9号土坑



11号土坑



12号土坑

No.	規模(cm)			平面形	断面形	覆 土			出土遺物	備考
	長	短	深				織り	粘性		
1	91	48	12	楕円形	浅い半円	1層 7.5YR 3/1(黒褐色)	強	中		
2	62	46	12	円形	台形	1層 7.5YR 3/4(暗褐色)ローム粒子を10%含む	中	強		
3	67	52	12	不規格円形	台形	1層 7.5YR 3/4(暗褐色)ローム粒子を10%含む	中	中		
4	47	46	43	円形	V字形					
5	48	42	14	円形	浅いV字形	1層 7.5YR 4/3(褐色)	強	中		
6	41	25	30	楕円形	台形	1層 7.5YR 5/2(暗褐色)ローム粒子を10%含む 2層 7.5YR 5/6(明褐色)ローム粒子を50%含む 3層 7.5YR 7/4(暗褐色)ローム層	強 強 中	強 強 強		
7	54	43	23	楕円形	半円	1層 7.5YR 2/1(褐色) 2層 7.5YR 5/6(暗褐色)ローム粒子50%含む	強 強	中 強		
8	85	72	31	円形	半円	1層 7.5YR 4/3(褐色)	強	中		
9	59	49	64	楕円形	台形	1層 7.5YR 3/1(暗褐色)ローム粒子を10%含む	強	強		
10	75	42	18	不整形	台形	1層 7.5YR 3/1(黒褐色)炭化物5%	強	中		
11	110	65	39	楕円形	台形					
12	130	61	35	楕円形	浅い台形					
P1	36	32	55	円形	V字形	1層 7.5YR 2/3(極暗褐色)ローム粒子を10%含む 2層 7.5YR 4/3(褐色)ローム粒子を40%含む 3層 7.5YR 3/4(暗褐色)ローム粒子を10%含む	中 弱 弱	中 中 中		
P2	32	28	13	楕円形	浅い台形	1層 7.5YR 2/3(極暗褐色)ローム粒子10%含む 2層 7.5YR 4/4(褐色)漸移層か	弱 弱	中 中		
P3	26	18	32	楕円形	V字形	1層 7.5YR 2/3(極暗褐色)ローム粒子を10%含む 2層 7.5YR 3/3(暗褐色)ローム粒子を10%含む 3層 7.5YR 4/4(褐色)漸移層か	強 強 強	中 中 強		
P4	25	22	40	円形	V字形	1層 7.5YR 3/2(極暗褐色)ローム粒子を10%含む	強	中		

第5表 上坑・ピット一覧表

4 遺構外出土遺物

今回の調査では、縄文時代の遺構は検出できなかったが、Ⅱ層及び直下のⅢ層内から縄文時代の土器と石器が多く出土している。出土量は、Ⅲ層からの割合が高い。本時代所産の遺物が出土したことは、調査地の周辺に、住居址等の遺構が埋没している可能性が推察できる。

土器（第12・13図）は、縄文時代前期後半が少量ではあるが出土している（1・2）。出土の主体は中期に属するもので、中期初頭（3・4）、中葉（5～14）、後葉（15～30）の各土器が出土しており、中でも後葉の出土量が最も多い。中葉はすべて後半の井戸尻期に属するもので、後葉は1期から3期まで幅広く見られる。また、前期同様に少量ではあるが、後期（31・32）、晚期（33・34）も出土している。

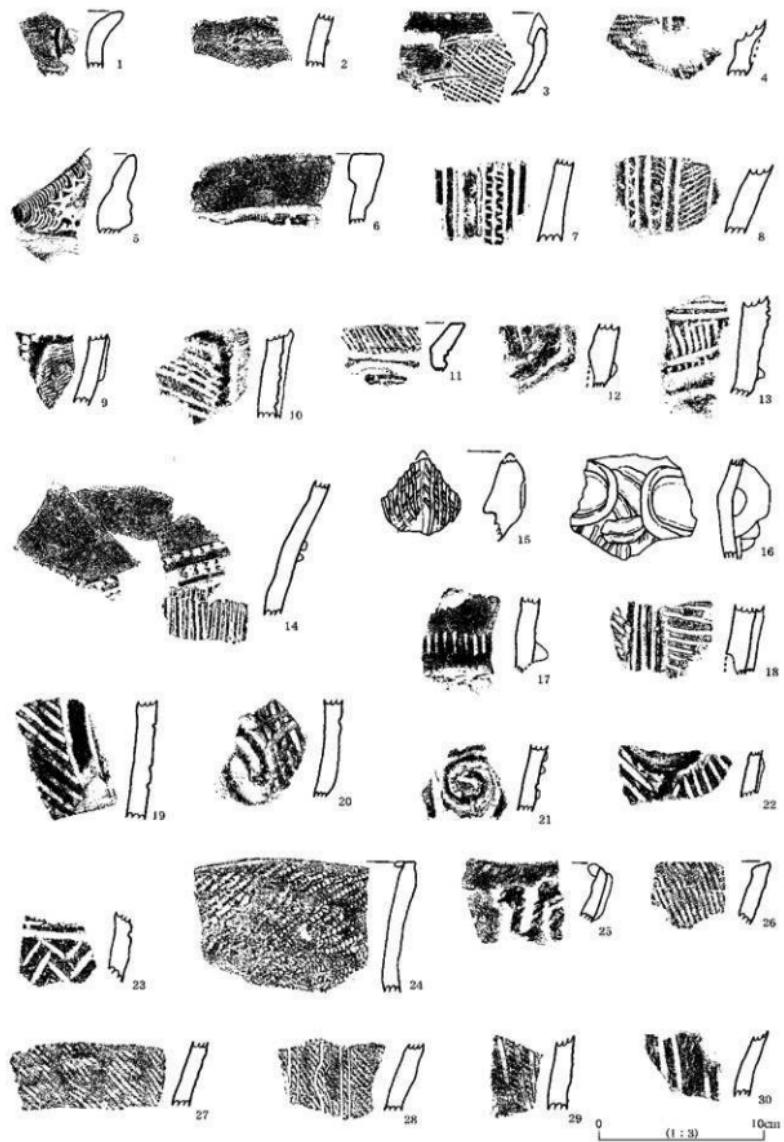
石器（第14図）は、Ⅲ層内から主に、石鎌（1～4）、打製石斧（5～8）、剥片石器（9）、凹（磨・敲）石（10）、特殊磨石（11）が出土しており、また使用痕の見られるものもあった。詳細については、第6表を参照されたい。



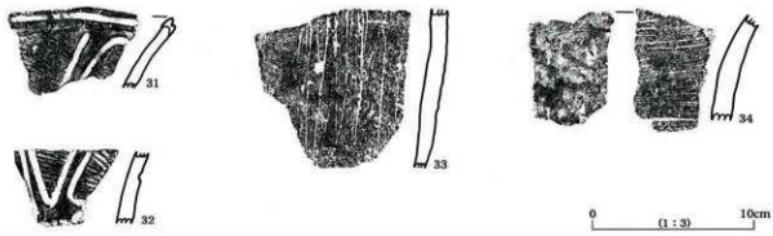
遺構外出土縄文土器 1



遺構外出土縄文土器 2



第12図 遺構外出土縄文土器拓影図 1



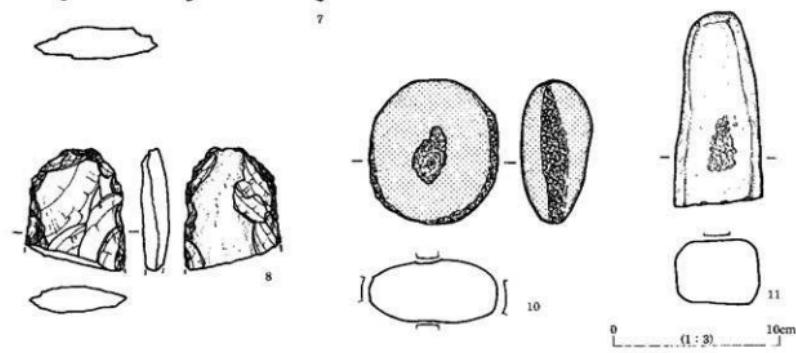
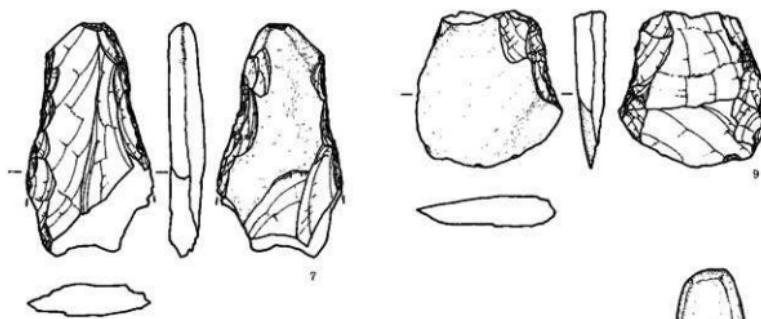
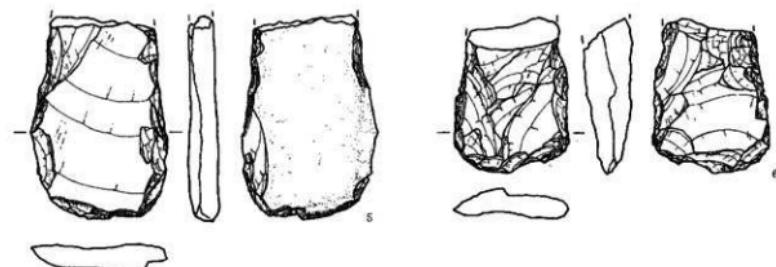
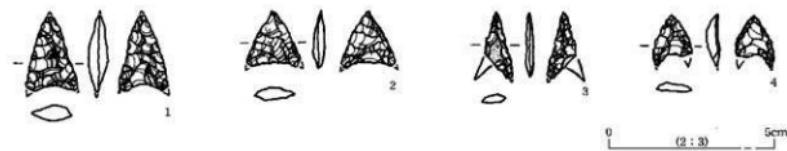
第13図 遺構外出土縄文土器拓影図2



遺構外出土石器1



遺構外出土石器2



第14図 造橋外出土石器実測図

(法量cm・g)

No.	検出箇所	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	Ⅲ層	石鎌	黒曜石	(2.4)	1.6	0.5	1.2	凹基無茎 先端・基部欠損
2	Ⅲ層	石鎌	黒曜石	(1.8)	1.7	0.4	0.7	凹基無茎 先端・基部欠損
3	Ⅲ層	石鎌	黒曜石	(2.2)	0.8	0.2	0.2	凹基無茎 先端・基部欠損
4	Ⅲ層	石鎌	黒曜石	(1.6)	7.0	0.3	0.4	凹基無茎 先端・基部欠損
5	Ⅲ層	打製石斧	粘板岩	(12.4)	7.8	1.7	(256.1)	中位より頂部欠損 基部側縁に擦痕(使用痕)有
6	Ⅲ層	打製石斧	砂岩	(9.7)	7.0	2.7	(197.1)	中位より頂部欠損
7	Ⅲ層	打製石斧	輝緑凝灰石	(14.2)	6.4	1.9	(269.1)	下位より基部欠損
8	Ⅲ層	打製石斧	輝緑凝灰石	(9.5)	5.6	1.5	(94.1)	中位より基部欠損
9	Ⅲ層	剥片石器	砂岩	(9.4)	8.3	1.7	(175.5)	側縁を加工痕有 打製石斧の木製品か?
10	Ⅲ層	凹石(磨・敲石)	砂岩	8.8	7.8	3.9	369.3	表裏面中央に凹痕 側縁部は敲打痕有
11	Ⅲ層	特殊磨石	砂岩	11.8	5.1	3.7	391.5	傷状の凹痕有 基部の敲打痕は少ない

第6表 遷構外出土石器観察表

第4章 総 括

今回の発掘調査は、広大な範囲に及ぶ遺跡の一部という事もあり、遺跡全体の様相を明らかにする事はできなかった。しかし、本遺跡では初めての本調査であり、遺跡の性格の一端を解明する事ができた事は大きな成果であったと言える。ここでは検出した遺構と出土遺物について若干の所見を付け加え総括としたい。

今回の調査箇所は北東から南西に向かう緩やかな傾斜面にあたり、その最下部は埋没した旧河川に近接する箇所と考えられ、遺構はあまり確認できなかった。

検出された遺構は竪穴住居址1軒、掘立柱建物址2棟、土坑12基、ピット4基であった。そのうち、唯一検出された竪穴住居址は北側が調査区外のため住居の半分のみの検出であった。床面直上から焼土、炭化物、住居の垂木と思われる炭化材が検出された事から、焼失住居であると考えられる。出土した遺物をみると、須恵器と土師器黒色土器の壺、長胴壺等があり、灰釉陶器が出土していない事から、平安時代初頭（9世紀前半から中頃）と推測され、1号掘立柱建物址もほぼ同時期の遺構だと考えられる。概ね同時代と推測される遺構は、同じ段丘上に位置する矢田尻・福与大原遺跡でも確認されており、平安時代前期には、当地において集落が存在していた可能性が伺える。

遺構外出土土器には、縄文時代中期のものが圧倒的に多い。これらは表土下のⅡ層及びⅢ層から出土しており、斜面の東（山側の高い位置）では集落址が確認できるのではないかと推測される。本遺跡に限らず、付近の遺跡でも縄文時代の遺構・遺物が多く検出され、この段丘上は「福与大原遺跡群」として県の重要遺跡にも登録されている。本調査において、確実に縄文時代と思われる遺構は検出されなかったが、縄文時代中期に人々が生活していた土地である事は間違いない。ただ、既出遺物に縄文時代前期後半の土器片が多かったため、縄文時代前期後半の遺構が存在するのではないかと予測していたが、今調査において、本時期の遺物は極わずかの出土にすぎず、既出遺物との関連性は未確認に終わった。

縄文時代と平安時代において人々が生活の場として利用してきた本遺跡は、箕輪町のみならず、伊那谷の歴史を探る上でも重要な遺跡である事は間違いない。しかし、今回調査した場所は遺跡の一部であり、全容を解明するためには更なる調査が必要と思われる。

本書の末筆にあたり、調査の成果が郷土の歴史と文化を解明する上で有意義に活用され、より多くの人に文化財保護にご理解いただければ幸いである。調査の進行と本書の作成にあたり、ご支援ご協力をいただいた地元福与区の皆様、そして調査にご協力いただいた全ての方々に厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献（著者名50音順）

- 安孫子昭二 1988『勝板式土器様式』『縄文土器大観2 中期I』 小学館
末木 健 1988『曾利式土器様式』『縄文土器大観3 中期II』 小学館
鈴木道之助 1981『図録 石器の基礎知識III 縄文』 柏書房
鳥居龍蔵 1926『先史及原始時代の上伊那』
長野県教育委員会 1974『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
－上伊那郡箕輪町－
長野県史刊行会 1988『長野県史』考古資料編 全1巻（4）遺構・遺物編
松本市教育委員会 1989『吉田川西遺跡』
箕輪町誌編纂刊行委員会 1976『箕輪町誌』第1巻 自然・現代編
箕輪町誌編纂刊行委員会 1986『箕輪町誌』第2巻 歴史編
箕輪町教育委員会 1979『福与大原遺跡I』
箕輪町教育委員会 1980『福与大原遺跡II・III』
箕輪町教育委員会 1988『上金遺跡』
箕輪町教育委員会 1989『堂地遺跡 中道遺跡』
箕輪町教育委員会 1991『郷沢遺跡』
箕輪町教育委員会 1997『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』
箕輪町教育委員会 1999『福与城東遺跡 福与中村遺跡』
箕輪町教育委員会 2002『福与城跡』

報 告 書 抄 錄

黒津原遺跡

平成18年度町道983号線道路拡幅工事に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成19年3月発行

編集・発行 長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地
箕輪町教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社

